

2. 人脈・現場主義・実践

私の中国に関する情報収集方法は次の三つをモットーとしている。すなわち、「人脈」、「現場主義」そして「実践」である。この三つのキーワードは、ともかくさまざまなおとところに出かける、ということである。この中で、もっとも重視しているのは「人脈」である。情報イコール人脈であり、人脈をつくるのが有力な情報を得ると考えており、その人脈づくりのために金と時間を惜しむな、そして、どこにでも出かけて行く、足で歩く（現場主義、実践）というのをモットーとしている。私のいう「人脈」とは中国のさまざまなパートナーとの人脈を作ることも指しているが、ここでは、主として、情報収集のための人脈づくりを指している。

情報が氾濫している今日にあって、いかにインターネットが普及しているとはいえ、すべての情報を常時ウオッチしているわけにはいかない。ただし、重要なことは、どのような情報が「どこ」にあり、その情報を得るには「誰」とコンタクトすればよいか、という「情報」を持っていることが重要である。

その「誰」（人脈）を作るには、さまざまな方法があるが、筆者が励行しているのが、各種研究会、セミナー、パーティーなどへの参加であり、内外のマスコミ（新聞記者）との意見交換、在外公館外交官との情報交換である。

新聞記者との意見交換（私は「飯を食べる」といい、北京や上海に行くたびに食事をしながら意見交換を行う）は、情報を得るだけではなく、「消息筋」の出所を探ることもできる。それによって、そのニュースが“新聞”か“旧聞”か、または信憑性はどうかチェックできる。

次に私は、「現場主義」「足で歩く」をモットーとしている。ネット上での情報収集も重要であるが、その確認が必要である。中国の「現場」（現地）に出かけ、人にあってこそ生きた情報が入手でき、また情報の正否が確認できるのである。

現地調査の場合には、そのやり方も重要である。大きくはミッション（代表団）での調査と個人での調査があるが、前者は組織に所属していないと難しいかもしれない。ミッションも実務ミッションと表敬ミッションがあるが、後者の場合には、できるだけ高級ミッションに参加することが望ましい。高級ミッションとは、政府および企業のトップミッションであるため、自分の判断で参加できるわけではないが、機会があれば積極的に参加すべきである。

「高級」の「高級」たるゆえんは、中国の有力指導者に会えるかどうかである。普段は入れない中南海（紫光閣）、人民大会堂、釣魚台迎賓館などでの要人との会見、宴席の機会があるからである。それ自体も貴重な経験になるが、言葉に自信があれば、中南海や迎賓館でのサービス（女性公務員）との何気ない会話から、思わぬ副産物（情報）を手にすることができる。私は、フォローのためにも、特別な用事がない場合にも、時間があれば、土産をもって迎賓館の友人を訪ねることにしている。中国の情報

を得るには、まめな“努力”が必要なのである。

ミッションの場合には、雑務に追われず、中国を視ることができるというメリットがあるが、逆に路地裏まで視ることができず、「走馬看花」（群盲象を評す）の域を出ない。一人旅は面倒なことが多いが、別の中国（本当の中国）が見えてくる。特に、地方視察の場合には、交通アクセスの不便さや思わぬアクシデントに出くわすことも多いが、中国の現実を見るうえでできるだけ一人で出かけるのがよい。昨今は、華やかな上海、しかも「新天地」（いまの上海で最もおしゃれな一角、中国共産党第一回全国会議跡の裏）だけを見て、中国は語れない。むしろ、郊外・農村を見てこそ、真実に迫ることができる。

地方にでかける場合にも、できるだけ地方指導者とも面会すべきである。なかなか、個人での面会は難しいが、それを可能にするのが日頃の人脈づくりの賜物である。地方指導者との面会では、時には、他地方との比較などを通じて、やや挑発的な質問をぶつけるのがよい。最近では、中央も地方も率直な議論ができるようにはなったが、依然として、おごなりの質問では、出てくる回答も「金太郎飴」となってしまう。具体的には、たとえば、上海での質問は、香港や北京との比較を行い、大連に行った場合には、深圳や広州との比較で質問するなど、相手の痛いところ、ないし、自信をくすぐるような質問をするなどの工夫が必要である。

しかし、気をつけなければならない点もある。中国の各地方には、大体、省都と商業発展都市の両方がある。一般には、商業都市の方が発展しており、かつ外資進出も多い。省都は政治の中心であり、党・政府の所在地であることから、許認可権限をバックに外資誘致を奨励するが、外資は沿海のインフラ条件のよい商業都市を選択する。

この両市のそりが合わないことがよくある。それを知らずにそれぞれを持ち上げたり、あるいは省都への表敬なしに、商業都市（進出都市）だけでことを済ませようとすると、問題が起こることがある。

遼寧省でいえば、省都は瀋陽、商業都市は大連であり、外資進出や開放度合いは圧倒的に大連が優勢である。山東省は、済南（省都）と青島がこれに該当する。遼寧も山東も現在では、省都と商業都市の間を高速道路で結んでおり、両者のさまざまな距離を縮めようとしている。四川省ではかつての成都と重慶の関係であったが、重慶の直轄市への昇格によって、やや事情が変わった。

地方視察のアレンジを依頼する窓口が各地方政府の外事弁公室（外弁 = waiban ワイバン）である。中央官庁も同じであるが、外国人が中国の機関を訪問する場合、訪問部署がわかっている場合でも、最初はこの外弁に連絡する必要がある。それをしないで直接交渉すると、外弁の面子がなくなり、その後は視察もやりにくくなる。現地では、「泣く子もだまる外弁」などともささやかれている。

この外弁との関係を作っておくと、その後、一人で出かけた場合にもさまざまな便宜を図ってくれる。もっとも、こうした関係を作るには、彼らとの人間関係を緊密にするために、食事や宴会も欠かせない。昨今、中国でも政府役人への接待が難

しくなっているが、地方では遠来の客を招く、招きに応じることは依然衰えていない。利権がらみの接待は控える必要があるが、交流や人脈づくりの接待は必要である（ここでも、「金を惜しんではならない」）。

私は中国の機関への訪問の際には、外弁、指導者の秘書などを窓口としているが、直接のパイプを持たない場合には、有力な取引先や別の組織に委託してもよい。最近、私は広東にあるエージェントを使うようになった。政府機関、企業へのアPOINTは外弁を使うより早く、実現性が高い。もちろん、ただではないが、費用よりも確実性が優先される。

次に、「実践」である。「現場主義」とも同じことであるが、各種の動向を確認、分析するにあたって、とまかく参加できるものには参加するということである。もとより、これには、資金が必要である。この「カネを惜しんではならない」「自腹を切ることを覚悟しなくてはならない」とはいうまでもない。

最近の経験を紹介しよう。いまは香港での証券会社勤務という立場上、中国企業の上場関連の情報収集に時間をかけている。新規に株式を公開する（IPO）というニュースに接したら、すぐに、幹事銀行にでかけ、目論見書を入手するようにしている。目論見書には、上場する企業の業界情報、市場情報が含まれているからであり、さながら、産業調査レポートを入手することと同じである。

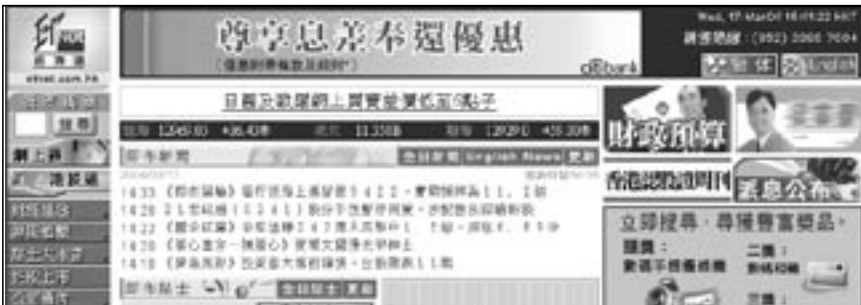
次に、香港では2004年2月25日から人民元の個人業務が始まった。早速、人民元口座の開設を行ったが、金利が銀行間でバラバラである。蓄財することが目的ではなく、口座開設にどのぐらい人が集まっているか、人民元を持ち込んでいるのか、香港ドルを換金して人民元を預金しているのか、などさまざまな情報を入手できる。

さらに、いえば「現場主義」にも入るが、最近の上場企業のヒアリングが中心になり、財務指標や工場の稼働状況などをみながら、上場企業の業績評価を行っている。

2003年9月に3度目の香港駐在となった。職場は変わったが、基本的に仕事の内容は同じである。立場上、上場企業の業績などマイクロ情報の収集が増えたことがこれまでとは違う点である。かつて香港情報は玉石混淆であり、「香港情報」（うわさ話で、真実ではない）として処理されていた。しかし、香港は情報のルツボであり、時には世界に先駆けて、「玉」があったことも事実である。したがって、香港情報イコール香港人脈を形成することが中国情報にとって不可欠であった。筆者も2回にわたる香港駐在経験から、これまで香港の重要性を強調してきた。

しかし、香港は97年の返還によって、その影を薄くし、「香港情報」も減価しているように思われる。その原因は、中国（本土）の情報開示が始まったこと、香港のチャイナウオッチャーが少なくなっていること、香港のマスメディアが北京への気遣いから内部情報の公開を控えていることなどと思われる。

香港の新聞を例にすると、これまでは大陸系（大公報、文匯報）、左派系（明報、信報）、中立系（香港経済日報）、台湾系（東方日報）、右派系（りんご日報）などに分れ、中国報道をめぐってもそれぞれの主張やリーク記事があり、それらの行間から中国情勢を分析したものだ。

香港大公報 <http://www.takungpao.com/>香港經濟日報 <http://www.hket.com/>

現在では、一応の系統はあるものの、その区別が明確ではなく、おしなべて同じになってしまった。この中で、筆者が最低2紙を購読するとすれば、「大公報」と「香港經濟日報」を挙げる。前者は大陸系の代表として、中国の公式発表をフォローするうえで必要である。後者は広東情報に強く、広東省の人事をフォローするうえでは他を圧倒している。

香港のチャイナ・ウォッチャーはマスコミ、研究者ともに、80年代に比べると極端に少なくなっている。優秀な記者は北京、上海駐在となっており、邦人記者の場合にも、香港は經濟部出身者が中心で、外信部（外報）出身者は北京あるいは台湾に移っている。マスコミだけを見ると、北京詣でを行い、人脈を作ったほうがよいかもしれない。

昨年も香港訪問中の薄熙来遼寧省長（商務部長就任）の昼食会（有料）に出席したが、日本人は小生以外、いなかった。名刺交換し、少し話しをする程度の「人脈づくり」であるが、重要な機会であり、今後、会見アポの取り付けができるかもしれない。香港の情報基地としての価値は衰えはしたが、依然重要である。とくに、華南でのビジネスを展開する人にとっては、香港に何らかの拠点を設置することが成功の秘訣ともいえる。

（稲垣清／東洋証券亞洲エコノミスト）